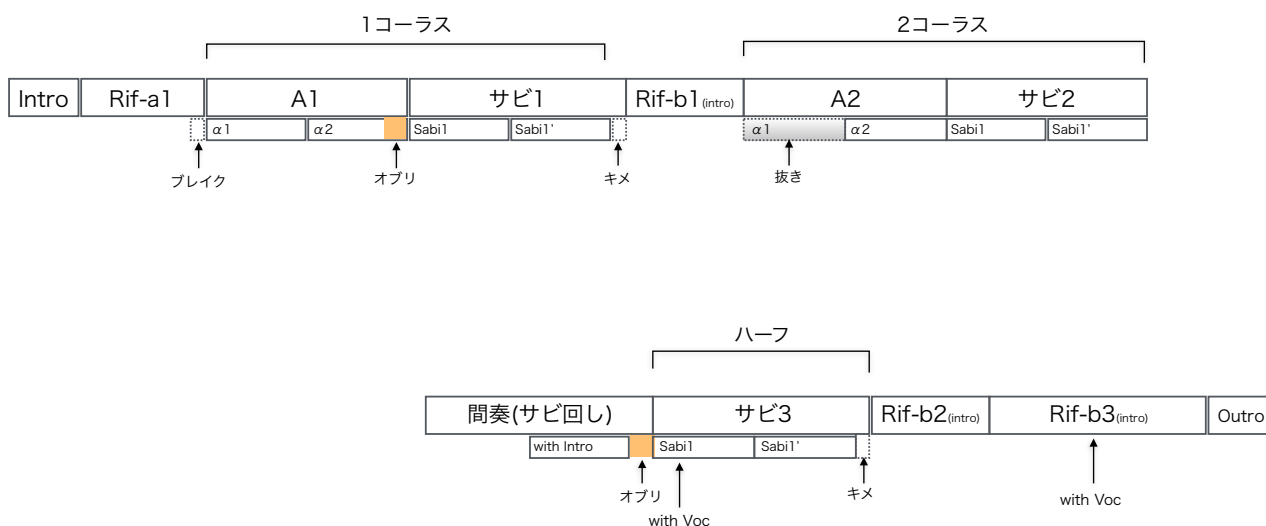


第8回 楽曲構造解析

楽曲の構造要素と構造パターン①

ワンコーラスの構造は「A-B-サビ」となるものが最も典型的です。この他にも「A-B-A」や「A-サビ」なかにはもっと複雑な構造を持つものがあります。この[A] [サビ]などを「セクション」「リハーサルNo.」などと呼びます。楽曲作り、アレンジメントにおいて全体構造を考えることはとても重要です。既存楽曲の構造を解析し、多くの構造パターンを蓄えておくことはアイディアの源泉になります。

[参考例] iRoid to be loved —K-MASERA—



iTunes <https://itun.es/jp/AQ3Zfb?i=1171225251>

Spotify <https://open.spotify.com/track/4PTMvygNdN9MYIUkD7mr>

メロディのストーリー作り

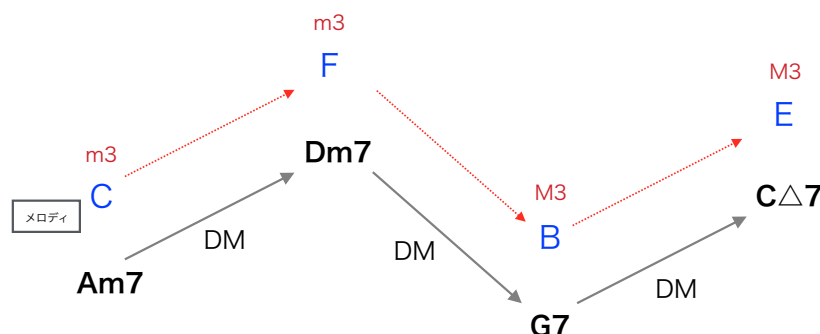
一般的な「3rd-7th」メロディやアッパーな「5th中心、テンションリゾーブ」のメロディ、もしくは力強い「R-3rd」メロディなど、コードに対するメロディのインターバルポジションで印象は大きく変わります。これに加え、もう少し長い時間軸でのコードに対する平均的なメロディポジションを考察します。

パラレルとアンチパラレル

メロディが十分動いているように聞こえていても、コードに対してインターバルがほぼ同じに動くものを「パラレルメロディ」と言います。非常にポピュラリティの高い「覚えやすい」メロディ型ですが、「陳腐・ダサい」ともなりやすく、このバランスを考慮してコントロールすべきメロディ型と言えます。ポイントとしてScale tone motion下降系パラレルにすれば「哀愁感」、Scale tone motion上行型パラレルでは「高揚感」が生まれやすく、Bメロの部分やサビ前の助走などに使うと効果的なことがあります。

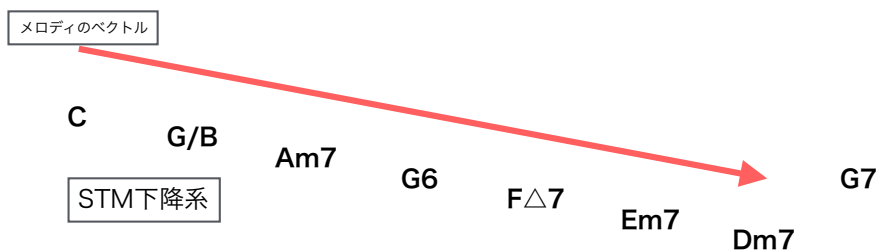
この形に逆らう動きになるのが「アンチパラレル」のメロディです。特にScale tone motion型でメロディのポイントを維持、もしくは逆行ベクトルにするとコードとメロディとの対比が生まれ、非常に印象深いメロディを構築することができます。

Diatonic dominant motion
でのパラレルメロディのイメージ



アンチパラレルはインターバルが変化していく

Scale tone motion下降系
パラレルメロディのイメージ



アンチパラレルはベクトルが水平、もしくは逆行する

etude5

Scale tone motion 下降系でのパラレルメロディとアンチパラレルを書き分ける。その際テンションリゾルブを要素として盛り込んでみる。

パラレル型

C G/B Am7 G6

F△7 Em7 Dm7 Dm7/G G7

アンチパラレル型

C G/B Am7 G6

F△7 Em7 Dm7 Dm7/G G7